

氏名	大西 ゆかり
学位の種類	博士(看護学)
報告番号	甲第 45 号
学位記番号	看博第 6 号
学位授与年月日	平成 26 年 3 月 19 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
論文題目	がんサバイバーのためのリンパ浮腫セルフマネジメントプログラムの開発 ーリンパ浮腫の予防的管理の習得に焦点をあててー Development of Lymphedema Self-Management Program for Cancer Survivors: Focus on Preventive Care
論文審査委員	主査 教授 藤田 佐和(高知県立大学) 副査 教授 森下 利子(高知県立大学) 教授 川村 美笑子(高知県立大学) 教授 長戸 和子(高知県立大学)

論文内容の要旨

【目的】本研究は、がんの治療後、リンパ浮腫発症のリスクがあるがんサバイバーのための「リンパ浮腫セルフマネジメントプログラム」（以下、患者教育プログラム）を開発し、評価・修正した患者教育プログラムを提示することである。

【患者教育プログラム開発過程】第一段階：社会的認知理論を基盤とし、文献検討を基に患者教育プログラム原案を作成した。患者教育プログラムの教育目標は、リンパ浮腫発症のリスクがあるがんサバイバーが、リンパ浮腫の予防的管理に必要な知識と技術を身につけ、意図的に行動することである。リンパ浮腫ケアに精通する学術専門家及びケア実践者 6 名を対象にインタビューを行い、患者教育プログラムを洗練化した。患者教育プログラムは 3 回のセッションで構成し、①リンパ浮腫の予防的管理を行うためのマネジメント、②心理的影響を調整するためのマネジメント、③日常生活を維持するためのマネジメントが習得できる包括的な内容とした。がんサバイバーの self-efficacy を高めるために、①遂行行動の達成、②モデリング、③症状の解釈、④言語的説得、⑤注意喚起、⑥説明的介入、⑦リラクゼーションの 7 つの教育技法を組み合わせることにした。

第二段階：患者教育プログラムを評価するための測定用具原案を作成し、その適切性を検討するために、リンパ浮腫ケアに精通する学術専門家及びケア実践者 6 名を対象に質問紙調査を行った。専門家の意見を参考に教育目標の到達度を問う認識 34 項目、行動 11 項目からなる質問紙を作成した。回答形式は、認識 4 段階、行動 5 段階の順序尺度を用いた。

第三段階：研究協力の得られた A 施設において、1 群事後テストデザインによる準実験研究を行った。倫理的配慮として、高知女子大学看護研究倫理審査委員会の承認後、研究協力施設の倫理審査委員会の承認を得た上で研究を開始した。対象者は乳がん、子宮がん、卵巣がんと診断され、リンパ節郭清術を受けた 31 名であった。対象者に患者教育プログラムを用いた介入を行い、その有効性は質問紙調査による教育目標の到達度と、リンパ浮腫の初期徴候の有無から検証した。31 名中 2 名にリンパ浮腫の初期徴候を認めた。質問紙調査より、認識 34 項目では「非常にそうである」と「ま

あまあそうである」を合わせると、全項目で 92.3～100%であった。行動 11 項目はいずれも 90.3～100%に変化を認めた。これより、教育目標を達成できたと考えられた。

【考察】がんサバイバーが、リンパ浮腫発症のリスクを最小限にするために、どのようにセルフマネジメントしたらよいかを示した患者教育プログラムを開発することができた。社会的認知理論を基盤にしたことによって、リンパ浮腫セルフマネジメントがどのような結果を引き起こすかという結果予期と、セルフマネジメントをうまくやり遂げられるかという効力予期が、教育目標の達成に寄与したと考える。また、7 つの教育技法を用いた教育的アプローチにより、がんサバイバーの self-efficacy が高まり、患者教育プログラムの効果につながったと考える。患者教育プログラムは、がんサバイバーのリンパ浮腫の予防的管理に有効であり、がん治療後もその人らしい生活や、QOL の維持につながる可能性がある。

審査結果の要旨

がん治療後のリンパ浮腫の発症は、がんサバイバーの身体機能の低下だけでなく、心理社会面をはじめ生活の様々な側面に困難をもたらしている。しかし生命に直結しないことから、適切な情報提供や発症後のケアに結び付かないことや看護基礎教育にはリンパ浮腫の治療や看護がカリキュラムに組み込まれていないため、患者教育も十分ではない。大西氏は臨床看護師として看護専門外来でリンパ浮腫外来を開設し、実践を通して本研究の課題・研究の問いへの発展をさせていった。

このプログラムの独創的な視点は、リンパ浮腫の予防的管理、そしてがんサバイバーのセルフマネジメントに着眼し、「がんサバイバーのためのリンパ浮腫セルフマネジメントプログラム」を Bandura の社会的認知理論を基盤とし、文献検討と専門家のインタビュー内容を基に丁寧に開発過程を踏んで患者教育プログラムを開発した点である。また、プログラム評価のための測定用具を開発し、その上で、開発したリンパ浮腫セルフマネジメントプログラムを 31 名の研究協力者を得て 1 群事後テストデザインによる準実験研究を行い有効性を検証し、内容を洗練化して臨床で活用できる妥当性のあるプログラムを提案したことである。具体的な患者教育プログラムの内容は、術前、術後、初回外来受診時の 3 回のセッションから成り、リンパ浮腫の予防的管理を行うためのマネジメント、心理的影響を調整するためのマネジメント、日常生活を維持するためのマネジメントの 3 つの習得に必要な内容で構成されている。介入方法としては、遂行行動の達成、モデリング、症状の解釈、言語的説得、注意喚起、説明的介入、リラクゼーションの 7 つの教育技法を組み合わせる方法を開発している。

プログラムの評価は、①教育目標の到達度と、②プログラム参加後の認識と行動の変化を 52 項目の質問紙によって行った。結果として、教育目標、リンパ浮腫セルフマネジメントの理解、3 つのマネジメントの習得、認識の変化を問う 34 項目では「非常にそうである」と「まあまあそうである」を合わせると、全項目 92.3～100%であった。行動の変化を問う 11 項目では、90.3～100%に行動の変化が認められ、プログラムに参加することでセルフマネジメントを始める動機づけ、予防管理のスキル修得がなされた。本プログラムは、がんサバイバーの self-efficacy を高めることにもつながったと判断され、プログラムの有効性は支持された。また、リンパ浮腫の初期徴候は、四肢の容積の変化、リンパ浮腫の自覚症状と他覚症状の項目数、体重の変化などを総合的に評価し、介入前後で比較した結果、31 名中 29 名 (93.5%) は初期徴候がなかったが、2 名に認められた。このことからリンパ浮腫を完全に予防することは難しいが発症のリスクを最小限にすることによって、リンパ

浮腫の発症や急性増悪を防ぎ重症化を予防することができること、一方で個別的な対応の必要性が示唆された。

以上のことから、本審査委員会は、本研究は研究テーマの着眼点、独創性、研究へ着実な取り組み、客観的な評価指標による検証、研究成果の有効性と実践への発展性、がん看護学発展への学術的価値があると結論づけ、博士（看護学）の学位授与に値する研究成果であることを認めた。しかし、研究協力者がリンパ浮腫に対する興味・関心が高い集団であった可能性、研究デザインが1群事後テストデザインであったため、対照群との比較や介入前後の比較検討ができていない、リンパ浮腫予防管理には長期的なセルフマネジメントの修得が必要とされるが今回は短期評価での検証であることなどに限界があり、課題が残った。今後はこれらの課題解決に向けた研究の継続が必要である。